



米原市におけるシシ垣の保存と活用

－ 近江のシシ垣 －

高橋順之

(滋賀県米原市教育委員会)

1. 滋賀県内のシシ垣の分布

滋賀県におけるシシ垣の分布は図1のとおりである。湖東地域の山麓部と高島郡・滋賀郡の比良山麓に集中していることがわかる。旧郡名ごとの概要は下記のとおりである。

坂田郡：旧伊吹町小泉（米原市）のシシ垣については後述する。彦根市の武奈町（元坂田郡）には石灰岩を積み上げた石垣が屋敷を取り巻くように築かれている。

犬上郡：多賀町八重練から杉坂峠のあたりに石垣のシシ垣があるという。四手にも幅1 m ぐらいの湖東流紋岩を用いた石垣があったが、開発等により破壊されている。

愛知郡：旧愛東町域（東近江市）の東側山麓には、平尾・大覚寺・上山本・北古屋を結んでシシ垣が構築されている。大覚寺の北隣の市野原には土手（土垣）が築かれていることが『百済寺境内図』に描かれている。平尾のシシ垣は三長さ九五二間（1713 m ）を測り近世末には一四五二間（2613 m ）に達していた。その構造は基本的に土手（土垣）で場所によって石垣・竹垣を用い、街道筋に木戸を設置した。高さは六尺～一間、幅三尺～一間である。石材は現地の谷筋で採取される湖東流紋岩で、石垣に沿ってイノシシを誘導し、跳躍を妨げる幅約60 cm ほどの堀がある。

神埼郡：旧永源寺町域（東近江市）には九居瀬・和南・高野・黄和田・杠葉尾にシシ垣が残る。いずれも湖東流紋岩を積み上げた石垣で、杠葉尾の林道沿いのものは、高さ1.2 m 以上、上幅1 m ～1.2 m で、30 cm ～1 m 大の横長の石を二個の上に一個置いて重心をとるように組み、目地を通さず、間詰め石を入れるなど優れた技術で築かれている。山側斜面には深い堀を掘っているところがある。

蒲生郡：『蒲生郡志』に中野・市辺・平田・武佐・老蘇などにシシ垣が構築された記述があり、「今堀日吉神社文書」に鹿々垣日記が残されている。

高島郡：旧マキノ町（高島市）海津・西浜では、栗の木と竹で丈夫な木垣を築き、約三〇間（54 m ）おきに一カ所の木戸を作った全長三七四三間半（6737 m ）のシシ垣が山麓一帯に張り巡らせている。旧新旭町（高島市）日爪のシシ垣は、幅1 m ～2 m 、深さ2 m ～3 m の溝で、里側に急斜面を作って飛び越えようとするイノシシを溝に落とす構造だったと考えられている。構築に重労働を要するため木垣などが併用されたと考えられる。木津では一二八六間（2314 m ）の木垣（一部土垣）を築いている。旧高島町（高島市）では鵜川・打下・勝野・音羽・押戸・伊黒を結ぶ山麓に延々8 km にわたってシシ垣が築かれている。打下では総間数九三七間（1687 m ）の石垣・木垣・土垣を築いており、うち土垣が五三八間二尺（969 m ）を占める。鵜川では「近郷追々鹿垣致候ニ付不得止」ず二六〇〇間余（4680 m ）のシシ垣を築いている。近隣の村がシシ垣を築くと、イノシシは必然シシ垣のない耕地に侵入することから構築にいたった状況がわかる。このように



して、高島郡内のシシ垣は村々を結んで築かれた。シシ垣は花崗岩で、崩れやすい「落とし積み」で築かれている。イノシシの前足が触れると、落ちてイノシシに当たり撃退する工夫である。旧朽木村（高島市）小川・平良・古屋では木を並立させたり、竹を横に並べた木垣で築かれている。滋賀郡：旧志賀町（大津市）では、北比良・南比良・大物三集落と荒川・木戸二集落の複数集落を囲い、湖岸を口にして「コ」の字に結ぶシシ垣がある。各集落にはシシ垣構築に関する古文書が残されている。北比良は木垣で、大物では石垣と「石垣立いし木垣」が混在し、浜辺では木垣になっている。荒川は現在でも集落と耕地を囲うシシ垣が良好に残っている。急崖の比良山地を流れ下る短く急勾配の河川は土石流をもたらし、天井川となる。荒川のシシ垣は北を流れる大谷川の土石流災害対策を兼ねたものである。構築には周辺に産出する花崗岩を利用しており、石積みの上に木の柵が設けられ、跳躍力のある鹿の侵入を防いでいる。高島郡や滋賀郡のように複数の村を結ぶシシ垣は長大で、農民の負担も多いが、同時期に造ることで被害防除効果に差が出ないことや、個々の村を囲うよりも長さが短く手間が少なくなり、村間の交通・交流が妨げられないという利点がある。このほか、南小松や山間部の栗原でも石垣が築かれている。

管見にふれた以上の事例から構築年代をみると、滋賀県においては元文元年（1736）の滋賀郡栗原の事例が最も古い。その後、宝暦九年（1759）の犬上郡佐目から、文政七年（1824）の坂田郡小泉までの65年間に10カ所で構築されており、これ以降の記録は修復のものである。この時期が近江におけるシシ垣構築の中心時期で、享和二年（1802）、近郷が構築したからやむを得ず取りかかった高島郡鶴川の翌年に隣村の打下が構築するなど、複数の集落がシシ垣を作っている。あわせて、この頃に近江において猪・鹿の被害が頻発していたことが想像される。

2. 米原市峠のシシ垣

伊吹山麓「峠」地域のシシ垣は、滋賀県米原市小泉字峯堂・峠平ならびに大久保字峯堂にある。現地は標高約300m前後の姉川に張り出した台地で、石灰石採石場の真下に展開するこの台地を通称「峠」とよぶ。肥えた土壌や寒暖の差、山から吹き降ろす風などの自然の恵みを受けて、古くから農耕地として利用されてきた。集落周辺に耕地がない大久保・小泉にとっては生命線ともいえる土地である。

シシ垣は、この台地全体を山から遮断するように構築されている。伊吹山に直結したこの地では、今日まで野生動物との戦いに、たいへんな苦勞を強いられてきた。文政七年（1824）浜松藩役所へシシ垣構築を願い出た文書（藤田家文書）には、八年前の大火で村が困窮しているうえ、峠畑の大豆などの作物が猪や鹿に荒らされて捨てて置けない状態であることがつづられている。シシ垣の種類は「土居切込」「石垣」「両表石垣」の三種類で、微地形と畑地の関係を考慮して工夫されている。総延長は約2520mである。文書はこの作業に対する扶持米を嘆願したもので、天保五年（1834）には、先に完成したシシ垣のうち土居切込工法の八〇〇間が毎年の高雪で破損し、たび重なる普請と年々の凶作で村が困窮しているために、残り三五〇間の石垣工事を浜松藩の普請にさせていただくよう再度嘆願している。

現在確認されているシシ垣は1000m弱である。シシ垣により台地は完全に封鎖されている（図2）。石材はすべて背後の崩落地で容易に採取できる石灰岩である。人ひとりでは抱えきれない大石を底部部や中央に置き、人頭大の石を落とし積みに仕上げている。各所に入口を設け、ここ



には木戸があったと考えられる。山側に面を整え、石と石の角を丁寧に合わせた作業がおこなわれており、裏込めの栗石もしっかり入っており、水はけを良くし、石垣の強度を高めている。隅石も長辺と短辺の石を交互に組み合わせた算木積みとなってなめらかに立ち上がっており、他のコーナーや入口なども変化を持たせている。このことは、シシ垣構築に専門の技術者の指導があったことを想定させる。その技術者とは誰か。『高島町史』によると「石垣のシシ垣は、石の採取が容易な里山に築かれ、築城経験のある石工や石組で棚田を開拓した村人の技術を駆使した」といわれている。台地を囲む伊吹・小泉・大久保の集落は、姉川の河岸段丘上にあり、いずれも高い石灰岩の石垣を駆使して集落を形成しており、石材や石積みの扱いにたけていたと考えられる。

3. 峠のシシ垣の保存と活用

明治八年の『滋賀縣坂田郡小泉村地引繪図』には、茶色の色彩を施した細長いシシ垣の区画が描かれている。この区画の所有者は「大字小泉村中」であることから、村普請として取り組まれ、村の共有財産として大切に管理されてきたことがわかる。さらに、近江におけるほとんどのシシ垣が水田を守るために築かれているが、峠のシシ垣は畑を守る点で希少性がある。

このシシ垣を永く後世に伝える方策のひとつに「文化財の指定」がある。米原市教育委員会では、一部シシ垣の図化と発掘調査を実施し、平成24年10月24日に滋賀県内で初めて、シシ垣を米原市の文化財に指定した。指定の種別は、土地の構築物（遺跡）として「史跡」指定である。これによって、遺構を開発から守り、適正な保存と活用を図り、整備・活用に向けた調査をさらに実施することで、将来にわたって活かしていくことができる。

シシ垣がある峠の台地には、「わくわく農園」が新たに開墾され、特産の峠大根などの復活に取り組まれている。2006年、地元大久保地区で、区民をはじめ「伊吹の源流を考える会」、シシ垣ネットワーク、奈良大学、米原市教育委員会が、シシ垣の保存や活用について、現地調査と公民館での講演や意見交換を行った。この活動で、峠のシシ垣は、地域の住民が先祖の苦勞とシシ垣構築という偉業に思いをはせながら、地域活性化へのシンボルになるのではないかという共通認識が芽生えた。同年、米原市伊吹薬草の里文化センターを会場に「第1回シシ垣サミット」が開催された。多くの方が参加して、シシ垣の歴史や構造、現在の獣害対策から見たシシ垣とその現代的意義などが報告され、多くの人にシシ垣遺構を認識していただく機会となった。

現地では、源流の会や教育委員会により看板が設置され、教育委員会ではパンフレット「伊吹山の山岳寺院」(2011.3)でシシ垣を紹介し、平成24年にはパンフレット「市史跡 峠のシシ垣」を作成して周知を図り、市の歴史講座の見学会や公民館の歴史ウォークなどで活用している。また、地元大久保区では、集落内の休耕田に可憐な花を咲かせるセツブンソウ群落の自生地を舞台に、毎年3月中旬に「セツブンソウまつり」を開催しており、前夜の講演会でシシ垣など地域の歴史文化が紹介され、翌日には、教育委員会と共催で、シシ垣見学会を開催している。また、近代までの主要道であった峠道の伐開もおこなわれ、シシ垣に沿ったルートでの復元が実現した。

周辺には、棚田、湧水、石灰窯跡、縄文遺跡、山岳寺院跡などの景観や史跡が点在しており、探訪ルートを設定して、交流の場、学習の場として活用されている。

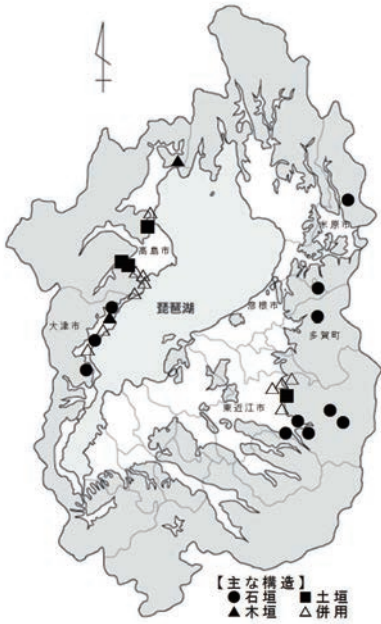
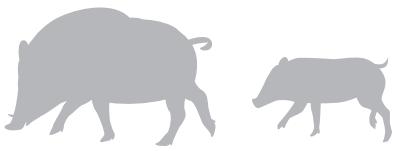


図1 滋賀県のシシ垣分布図



図2 峠のシシ垣位置図



写真1 シシ垣見学会



写真2 講演会



写真3 セツブンソウ



写真4 棚田